

二〇〇七年に京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻を修了した田中奈津子(たなか・なつこ)福岡・一九八二)は、在学中より個展やグループ展などに取り組みなど、現在までに精力的に制作・発表活動を続けています。

当初、身近な日常の中で不意に得たイメージを膨らませ、それらをモチーフに絵画・版画のテクニックを組み合わせた絵画制作を続けていた田中は、二〇一五年より包装紙や広告・カレンダー等を素材として、毎日「壺」の絵を描くことに取り組み始めます。

これは、それまでの制作が田中の自由なイメージ・様々なテクニックによるものであったのに対し、壺という制約、日々描き続けるという制約を自身に与える行為であるといえ、田中はこの制作をおよそ一年に渡って続けています。

初期には壺を「描く」ための思考や、絵画としての画面づくりへの意識も強く、制作スピードを得るためにも「ラージ」技法を多用していたその制作は、次第に技法や素材を限定しないものとなり、画面にはその日その日の変化が多様に現れるようになります。

ラフに筆を走らせた日、手によってつくられた壺を思い、手だけで描いた日、自身の作品の切れ端や事前に準備した素材を用いた日、細かな「ラージ」を重ねた日、ボールペンで走り描いた日など。当初の田中の制作姿勢が「絵画にすることであったとするならば、その後の制作はあらゆる技法や素材を用い、様々なアプローチによって「絵画をする」ものであるように見受けられます。そして画面に起こる変化は田中の絵画に対する思考やアプローチの変遷として見ることもできます。

自身の感性に強く頼るのではなく、五感、記憶や経験、感情や体調、身体や道具、時間などのあらゆる要素を手がかりに続けられた「きょうの壺」の制作は、田中にとっぴつしか自由を封じる制約ではなく、自分自身にかかっていた制約を検証する機会として、あるいは自身を支える「芯」のようなものとして位置付けられることとなります。

本展では二〇一六年十二月十五日から年を跨いで、二〇一七年一月十五日までの三十二日間(一ヶ月)の計算を間違えていたために渡って、田中が毎日「絵画した」痕跡である、「壺の絵」を展示いたします。

展示された三十二点の「壺」は、確かに毎日の連続した取り組みの結果であると言えますが、それが昨日(過去)からのイメージの引用や、テクニックのバリエーションに陥ることなく、「つひつひつ」の「絵画」として独立しているのを見て取れます。これは田中が毎日「ゼロに戻る」こと。そして、そこから毎日「絵画をする」ことに真摯に取り組んだ記録であるといえるのではないのでしょうか。

田中奈津子 TANAKA Natsuko

同じ道、一步のたびにみえるものが変わる、風景画は苦手だけど、なんだかそういう絵だったら描けそうな気がしたわって、雲の隙間に言ってみる、声は何色か知らないけど空の青に消えちゃった、でも石の形になってなんか落ちてきた、これ投げつきたい、わたし後ろに手を編んでいるのよ、編み目のあいだからなんか染みてるでしよう？ 地面まで染めたいわ、どこまでグラデーションにしたいですか？ 質問は転がった、先生は箱の中に入れていたからあれは似てる人、似てる人の顔描けます！ 貼ります！ いやですか？ 心当たりがあるんでしよう、痛いんでしよう、彼に野線を引く、彼女に球体を持たせる、ふたりのあいだは風だか時間だか、測らないでね、猫のように眠りたいんだってね、言っていないけど、大丈夫結ぶから、もっとこっちで話そう、ことばを分けて、並べ替えよう、八行はわたしの、力行はあげる、あとは売ろう、お金になるかな、どんなお金、食べられたらいいのにな、何味でいつ美味しいかなあ、焼いたほうがいいのかなあ、誰かに作ってほしいな、そしたら口以外で食べられる気がする、歯はもういらないね、あたし病気になるっちゃう！ 誰がお見舞いに来てくれるかなあ、嫌われちゃうかなあ、犬連れて来てほしいな、トイツっぽいブードルの白と黒、灰色はつくるよ、なかね、ちよっと温度が違うんだよ、適温なの、差がないの、溶けちゃうの、いなくなっちゃうの、悲しい、ちゃんと日記に書かなきゃね、あなたも書かなきゃだめよ、待ってるわ、日光を避けて、約束は捨てないで、約束してないことも捨てないで、頭われそう！ 言い訳ばかりで、ごめんなさい、でも許して、わたしにも他人にも許して、あなたにも許して、きょうはもう二度とこないから、壺のなかに満たして、根のある花を咲かせましよう

きょうの壺プレミアムの制作期間中に考えたこと

「なぜ壺なのか？」

きょうの壺をはじめから、散々「なぜ壺なのか？」という質問を受けた。当初は、正直に、ただ毎日描くに耐えうる形を持ったものであればなんでもよかった。毎日の表現の振幅を測る、ポーターラインとしての役割をしてくれる存在であれば。

抽象への助走、具象への最後の執着として、ミニマルな形態でも一目見たただけで誰でもその用途まで想像できるともよいモチーフだった。

2015年紙おろす一年間、主に身の回りの生活の中で手に入る包装紙等の素材を使用して描き続ける中で、制作方法は多様に變化していったが、一つだけ残った絶対条件は、「壺の形を切り抜く」ということだった。

壺の形を切り抜く時、まるで世界からわたしの輪郭を明らかにしていくような感触があった。毎日わたしが目覚め、きょうを描き、寝床につくように、平面の中に収まらぬ。わたしが日々を生きていること、きょうの壺の制作が同一平面上で交わり、絡まりながら、絵を編んでいく。

「きょうの壺プレミアムの制作では、「生きて、描く」のか、「描いて、生きる」のか、また「現実があつて虚構があるのか」、虚構のために現実がある」のか、原因や目的や結果といったものが織り混ざって乱れ、「ただ、描く」ということだけが確かだった。

ある時は壺が自分の身体のように見え、ある時は世界や私を閉じたり開いたりする鍵穴のように見え、ある時は満たすことのできる空洞、ある時は素材たちの待ち合わせ場所、ある時は全くの間、ある時は別世界、ある時は他者、ある時は壺それ自体に見えた。

「なぜ壺を描くのですか？」という問いには未だ「ただ壺を描くのです」という答えしかできないけれども、ただ壺を描くことの中で見えてくるもの、それを見るためにただ壺を描いているのだ。

「1ヶ月の絵、1日の絵」

「図と地」私と世界

今まで、無意識に壺をフレームに収めてきた。壺の絵を描くことは、初めから図と地を免れ得ない構造だったし、図と地のシンプルな組み合わせ、シンメトリーの構図は「一周回って絵画の根本に立ち戻ったよう」で、気に入っていた。しかし今回はその関係性に対して検証的、能動的でありたくて、あえて壺の形それ自体をフレームとして設定した。フレームの中に、「きょう」の思い出が満たされていくような感覚だ。そしてそれをさらに縦横のフレームに収めたくなった時は、そうした。

図だけの絵、必要ならば地の中に図を収めた絵。洞窟から始まり、壁や窓、襖、建築物の中に納まり、そこから独立して紙やキャンバスへ描かれるようになった。戦略的に四角以外に描かれることもあったけれど、縦と横の線に囲まれた平面の中に、描きたいものをいかに収めるかは、

ずっと続いている絵画の命題の一つである。それ自体がフレームである壺をさらに縦横のフレームに収めるとき、私の中で現在完了したものかたりを絵画、美術という枠の中に収め、私から引き離し、世界の中に現存させる、表現活動それ自体の過程と重なる感触があった。

「見る、と、見られる、の間のこと。」

知覚することは、世界から受けとること。考えること、感じること、想像することは私の内部で、受け取ったものを結ぶこと。描くことは、結ばれたものに、色や形塗りや線によって、輪郭を与えていく作業。初めから最後まで意識的に行われることもあれば、無意識に預けてみることもある。

時にそれは、色や形、造形の道具それ自体によって、形作られることもある。言葉以外のものを表すためであったのに、言葉によってその骨格が組まれることもある。描くためのシステムであったものが、システムそれ自体が絵を生むようにもなる。様々な変容の過程を経て、描かれたものを、他者の視線の見る、と見られる、の間のこと。

「思い出系絵画」

毎日壺の絵を描くので、意識がある時間は、もしかしたら意識がない時間でさえ、どんな壺にしようか考えていた。その日見たもの、考えたこと、知覚したもの、他者と交わした言葉、その時聴いていた音楽、事前に準備していた素材、そつじつたものに支えられて描いた。描いている時だけが絵を成り立たせているのではなく、それ以外のすべてがそつじつに結ばれる。今日に句点を打ち、やがて毎日の読点となる、その日にかいながった私と世界の思い出の絵画。

「何かのためではない絵画」

宗教や思想のためでもなく、お金のためでもなく、絵画それ自体のためでもない、わたしのための絵画が描きたい。描くことに目的はなく、目的語と動詞は結ばれて、「絵画する」という動詞になる。そしてその絵が、あるいはその制作の在り方が、他者に繋がっていかれば、と祈るような気持ちでいる。私の母はずつと誰かのために生きてきた。姉になり、保育者になり、妻になり、母になり、今は祖母の世話をしている。ずつと他者に手を差し出す生き方をしていく。確実に誰かの役に立っているのに、彼女の名前が表に出て何か形のある賞賛を受けることはないだろう。私の母だけではない、この世界には無記名の贈り物が、いたるところに捧げられている。それに比べて自分の名前を前面に出し、他のためでない、わたしのための絵画が描きたい、などと仰々しく言っていて、何の役にも立たないものを、堂々と人前に並べることのずつずつしさ。でも続ける。何かのためではなく、ただ、ありがとう、と言って、世界を見て、描いて、おくりかえす。

略歴

1981 福岡県北九州市生まれ
2005 京都市立芸術大学美術学部美術科油画専攻卒業
2007 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了

個展

2002 WORLD /岡田屋本店ギャラリー(三重)
2004 The golden time in Cambodia /GALLERY ANTENNA(京都)
2005 水辺の人 /GALLERY ANTENNA(京都)
2006 孤島群 /複眼ギャラリー(大阪)
キヤラリー Den 58(大阪)
2007 京都市立芸術大学作品展第三会場学内展
2009 私湯 /MEM(大阪)
2011 デコレーション /アトスペース 虹(京都)
2012 豊かな絵 /アトスペース 虹(京都)
2013 Fantasy for Adults /アトスペース 虹(京都)
2014 わたし壺世界 /アトスペース 虹(京都)
2016 繋ぐ、結ぶ、続く、絵 /アトスペース 虹(京都)

グループ展

2003 現代美術 /インディペンデントCASO展
2004 グループ展「ひと展」 /京都市立芸術大学大ギャラリー /日本カメラ祭 /三ノ木町旧新聞配達所
2005 山本恵と2人展「花と人」 /ポーターレスアートギャラリー /NONOMA(滋賀)
ローリー・ヘンクス人展「ANOTHER STORY」 /GALLERY ANTENNA(京都)
2006 GENSE ART EXHIBITION /建仁寺禅居庵(京都)
2007 作品中 /galerie 16(京都)
in my room /FLUKIGAN GALLERY (大阪)
58号室展 /ギャラリー Den 58(大阪)
ART AWARD TOKYO /行幸地下ギャラリー(東京)
ケンティンクスの恋人 /海岸通ギャラリー CASO、MEM(大阪)
2010 京都オーブンスタジオ
2012 「あれから、そして、これから」 /山本俊夫、藤原康子、田中奈津子 /ギャラリーモーニング(京都)
つづいてみたかったもの /CAFÉ PULLPO(京都)
2013 「悦ばしき知覚」 関口敦仁、山部泰司、松井沙都子、田中奈津子 /galerie 16(京都)
つづいてみたかったもののおみせ /同時代ギャラリー /スタジオ1928(京都)
2014 掲示板アート /片瀬繪香、山本恵、田中奈津子 /高尾小フエ2015(京都)
2016 二人展「SPECTRA」 鷹木明、田中奈津子 /ギャラリー恵風(京都)

受賞

2015 きょうの壺 マネックス証券Art in the office
2015 審査員特別賞

